

編著者紹介

(五十音順)

[編 者]

小田 博志 (おだ・ひろし)

まえがき、第1章、第4章、あとがき

北海道大学大学院文学研究科准教授。専攻は文化人類学。ドイツに関わる戦後・植民地後和解について調査を進めている。著書に『エスノグラフィー入門―〈現場〉を質的研究する』(春秋社、2010年)、『アイヌモシリと平和』(共著、越田清和編、法律文化社、2012年)などがある。

関 雄二 (せき・ゆうじ)

まえがき、第5章、あとがき

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。アンデス文明の生成過程、文化遺産の保存と活用を研究。主な著書に『古代アンデス 権力の考古学』(京都大学学術出版会、2006年)、『グアテマラ内戦後 人間の安全保障の挑戦』(狐崎知己・中村雄祐と共編、明石書店、2009年)などがある。

[執筆者]

内海 愛子 (うつみ・あいこ)

第7章

大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター特任教授。専攻は歴史社会学。在日朝鮮人などマイノリティの人権問題に関心をもって活動、戦後補償、戦争裁判、捕虜などについて現場調査を続けてきた。著書に『朝鮮人B C級戦犯の記録』(勁草書房 1982年)、『戦後補償から考える日本とアジア』(山川出版社、2002年)、『スガモブリズナー戦犯たちの平和運動』(吉川弘文館、2004年)、『日本軍の捕虜政策』(青木書店、2005年)、『東京裁判―捕虜関係資料』(全3巻)(共編著、現代史料出版、2012年)などがある。

金 敬黙 (キム・ギョンムク)

第8章

中京大学国際教養学部教授。専攻は国際関係論。脱北者の海外移住について調査を進めている。著書に『越境するNGOネットワーク』(明石書店、2008年)、『NGOの源流をたずねて』(めこん、2011年)などがある。

栗本 英世 (くりもと・えいせい)

第2章

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専攻は社会人類学、アフリカ民族誌学。南スーダンの戦後復興と平和構築について調査研究を進めている。著書に『未開の戦争、現代の戦争』(岩波書店、1999年)、監修に『叢書コンフリクトの人文学』(全4巻、大阪大学出版会、2012年)などがある。

辰巳[福武]慎太郎 (たつみ[ふくたけ]・しんたろう)

第3章、第7章

上智大学総合グローバル学部准教授。専攻は文化人類学。東ティモール、インドネシアの境域社会の研究を進めている。論文に「略奪婚―ティモール南テトゥン社会における暴力と和解に関する一考察」『文化人類学』(第72巻1号、2007年、44-67頁)、「開発を翻訳する―東ティモールにおける住民参加型プロジェクトを事例に」信田敏宏・真崎克彦編『東南アジア・南アジア開発の

人類学』（明石書店、2009年、157-184頁）などがある。

辰巳 頼子（たつみ・よりこ）

第7章、第9章

清泉女子大学文学部専任講師。専攻は文化人類学、東南アジア地域研究。フィリピンのムスリム社会における人びとの移動とイスラーム実践について調査を進めてきた。「旅して学ぶーフィリピン・ムスリム留学生の事例から」床呂郁哉・西井凉子・福島康博編『東南アジアのイスラーム』（東京外国語大学出版会、2012年、29-47頁）、辰巳頼子・辰巳慎太郎「『自主避難』のエスノグラフィー東ティモールの独立紛争と福島原発事故をめぐる移動と定住の人類学」赤嶺淳編『グローバル社会を歩くーかかわりの人間文化学』（新泉社、2013年、240-299頁）などがある。

福島 在行（ふくしま・ありゆき）

第6章、ガイド

日本現代史研究者、平和博物館研究者。専攻は歴史学。戦後日本の平和博物館およびその前史について民衆運動史的観点を基礎に研究している。主な業績として、「平和博物館と歴史ー「戦後」日本という文脈から考える」（『日本史研究』第607号、2013年、112-131頁）、「〈平和博物館研究〉に向けてー日本における平和博物館研究史とこれから」（『立命館平和研究』別冊、2009年、1-77頁、岩間優希と共著）などがある。